



一般社団法人 アクト・ビヨンド・トラスト 2020 年度助成企画募集のご案内

～ ネオニコチノイド系農薬に関する企画 ～

お米から果物など幅広い農産物に用いられ、シロアリ駆除剤や家庭用殺虫剤として身近な暮らしにも入り込んでいる浸透性殺虫剤(ネオニコチノイドおよびフィプロニル)——。近年の急速な研究の進展により、土壌や水中での持続的な慢性曝露による無脊椎動物への時間累積的毒性や、食物連鎖を通じた漁業への脅威などが明らかになりつつあります。世界の科学者コミュニティからは、生態系と生物多様性全体を脅かすことへの警鐘が鳴らされているだけでなく、ヒトへの毒性を懸念する声も挙がっています。

本助成は、予防原則を踏まえて、製薬メーカーの意向や現行の行政判断に左右されない独立の立場から浸透性殺虫剤の影響を検証する「調査・研究」活動と、浸透性殺虫剤の問題点や最新の研究成果を広く共有する「広報・社会訴求」活動とを支援します。浸透性殺虫剤の被害を防ぐ、規制のあり方や一般市民の消費行動を変える働きかけに活かされるといった方向で、これからの社会が浸透性殺虫剤に向かい合うための公共的な議論の土台となる成果を期待しています。ふるってご応募ください！（応募要項など申請書類一式は下記リンクよりどうぞ）

<https://www.actbeyondtrust.org/program/kobo2020/>

1. **応募資格：**ネオニコチノイド系農薬(およびフィプロニル)に関する問題提起や、使用の削減ないし中止に取り組む個人および団体(ボランティアグループ、NPO/NGO、公益法人、研究機関、生産者など。地域、法人格、活動実績は不問)
2. **助成分野と金額：**調査・研究部門もしくは広報・社会訴求部門(いずれかを選択)
1 企画あたりの助成額: 上限 100 万円
3. **助成対象期間：**2020 年 4 月 1 日～2021 年 3 月 31 日の間に実施される活動
4. **応募受付期間：**2019 年 12 月 4 日～2020 年 2 月 3 日
5. **問い合わせ先：**一般社団法人アクト・ビヨンド・トラスト 助成係
電話: 070-6551-9266 (10:00～19:00)
Email: grant@actbeyondtrust.org
<http://www.actbeyondtrust.org>
<https://www.facebook.com/actbeyondtrust>
【12/28～1/5 は年末年始休業】



一般社団法人アクト・ビヨンド・トラストは、自然環境と人間生活の調和を目的とした市民や NPO・NGO の活動を支援する、独立した民間基金です。問題解決のための具体的・効果的・創造的なアクションを重視し、資金援助、コンサルティング、技術および人材提供、トレーニングなどを行なっています。詳しくは上記ホームページや Facebook をご覧ください。

これまでの企画から

2019 年度に採択された企画例をご紹介します(当該年度は調査・研究部門のみ)。

これまでに実施された企画は、アクト・ビヨンド・トラスト web サイトの「助成プログラム」(公募助成)をご参照ください。2018 年度までの各助成対象企画について報告書をご覧いただけるほか、同サイトの「助成先活動情報」では、2019 年度助成対象企画の活動状況をリアルタイムで取り上げています。

<http://www.actbeyondtrust.org>



調査・研究部門の場合(2019 年度公募は同部門のみ)、学術誌の査読をクリアできる確実な成果を求めますが、学界への寄与にとどまらず、地域コミュニティへの啓発や、市民活動の根拠となるエビデンスとして広く活用されうる、中立で開かれた姿勢を歓迎します。

■ ネオニコチノイドによる水生生物への生態リスク比較～作目種及び散布方法による影響～

宍道湖水田地域、静岡県茶畑地域及び千葉県水田ドローン空中散布地域における河川及び水田について、ネオニコチノイド(NN)濃度を高精度に把握し、地域特有の水生生物及び水生生物全体への生態リスクを推定する。また、対照地区として流域に農地のない佐鳴湖についても調査する。これにより、散布時期や散布量の異なる作物種に散布した場合の生態リスクの比較、ドローン空中散布と通常散布による生態リスクの比較、農地の有無によるリスクの比較を行い、リスクの低い散布方法や作物種によるリスクの差異等を把握し、広く社会に提供する。さらに、東京大学の山室教授と協力して近年動物プランクトン個体数減少の著しい宍道湖や流域住民の関心の深い佐鳴湖について NN の影響を推定し、宍道湖漁業回復法の提起や佐鳴湖の汚染状況を住民に周知する。

■ ネオニコチノイド系農薬が佐鳴湖の生態系に与える影響調査

佐鳴湖は、プランクトン、魚類などの生物は豊富に生息しているが底生生物は貧弱である。底生生物は水中の有機物を消費し、水中の浮遊生態系と底生生態系つなぐ重要な役割を果たしている。現在イトミミズ、ゴカイ、ユスリカなどの底生生物は 2000 年以降急激に減少し、その要因として塩分濃度の上昇と流域から流入するネオニコチノイド系農薬の影響が考えられる。本来は行政が調査するべきであるが、その方針・計画がないので申請者(辻野)が実施することにした。

■ 平野部の水田ではネオニコを使う必要が無いことを証明し見える化する

平野部にある河北潟周辺の水田地帯は面積が大きいことから、空中散布等によりネオニコチノイド系農薬が大規模に使用されている。我々は、生きもの元気米の取り組みを通じて、河北潟周辺の水田ではネオニコを使わなくても斑点米被害は起こらないことを示し、取り組みを拡大してきたが、地域では未だネオニコが「念のため」使われ続けている。今回の企画では、市民と農家の目に見える形で調査結果を効果的に示すことにより、地域におけるネオニコ使用のさらなる削減を目指す。こうした手法が、広く全国の平野部水田や、ネオニコが使用されている畑や街路樹等の取り組みにつながるよう冊子及びビデオとして整理する。

■ ため池や自然止水域におけるネオニコチノイド系農薬の汚染状況と絶滅危惧水生昆虫の生息状況の関連調査

日本固有種で絶滅危惧種 I 類のマダラナニワトンボの減少要因は、埋め立てや植生遷移などとされてきたが、近年原因不明の地域絶滅が進行している。今年度岐阜県内の絶滅産地数地点で予備的な水質分析を行ったところ、高濃度のネオニコチノイド系農薬が検出された。本研究ではこれを契機に各地の水田以外の止水性水生昆虫の減少が同農薬である可能性に着目し、北海道から南西諸島までの各地の希少水生昆虫生息地で調査を実施、検証を行なう。